

# 自伝的記憶における主観的時間に関する検討

—時間的分節化、主観的時間的距離、タイムギャップ感の相互関連—

○松村江里香・野村晴夫

(大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：自伝的記憶、主観的時間、タイムギャップ感

A study of subjective time in autobiographical memory

Erika MATSUMURA・Haruo NOMURA

(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Key words: autobiographical memory, subjective time, feeling of time gap

## 目 的

「時間」は大きく分けて二つに区分できよう。一つは、時計やカレンダーの時間のような、我々の外側にある「客観的時間」である。いま一つは、我々のなかにある「主観的時間」である。例えば、同じ時期に起こった出来事でも、まるで昨日のここのように思われるものもあれば、かなり昔のここのように思われるものもあるだろう。

上記のような、自伝的記憶におけるある出来事までの時間感覚については、これまでに複数提起されている。例えば、「分節化」(体験に時間の区切りをいれて表象すること:白井, 2008) (本研究では白井のいう「分節化」を「時間的分節化」と称する)、「主観的時間的距離 (subjective temporal distance)」(ある出来事に対してどの程度近く、もしくは離れて感じるかという感覚のこと: Ross & Wilson, 2002)、「タイムギャップ感」(ある出来事の正確な生起時期を想起した際に抱く、客観的経過時間と主観的経過時間のずれの感覚のこと: 下島, 2001)である(各々の時間感覚の具体例については、Table 1 の「質問項目」参照)。これら三つの時間感覚は、各々の独自性や相互関連について十分に検討されることなく、混同されたまま議論されてきた。特に、主観的時間的距離とタイムギャップ感については、どちらも「出来事が自伝的記憶の時間軸においてどのように体制化されているか」という観点から、同一の次元で議論がなされてきたように思われる。

そこで本研究では、今後の主観的時間研究の基盤に資するべく、それら三つの時間感覚の相互関連を検討することを目的とした。全ての調査協力者が同じ時期に経験したであろう高校卒業式をターゲットとし、高校卒業式までの三つの時間感覚について、関連研究を行った。

## 方 法

**調査協力者および手続き** 大阪府内の大学に在籍する大学生 187 名 (男性 109 名, 女性 78 名) を対象として、2013 年 4 月 (T1) に第 1 回の調査を、それ以降 2, 3 ヶ月の間隔において第 2 回 (T2), 第 3 回 (T3) の調査を行った。調査は、大学の複数の授業において、各々の授業担当教員の了承・協力のもと、授業時間内あるいは授業後に一斉に実施し、その場で回収した。

**質問紙** (a) フェイスシート (生年月、性別、年齢、学年・学部、学籍番号の下二桁、進学形態 (現役生、浪人生、その他) を問う)。(b) 時間的分節化尺度 (高校卒業式が当人にとっての「過去」と感じられるのか、あるいは「現在」と感じられるのかの程度を測定する)。(c) 主観的時間的距離尺度 (高校卒業式に対してどの程度近く、あるいは離れて感じるかを測定する)。(d) タイムギャップ感尺度 (高校卒業式の生起時期を意識した時に感じる、主観的経過時間と客観的経過時間のずれの感覚の程度を測定する)。(b) (c) (d) については、各々の時間感覚の定義や先行研究を参考に筆者が作成した

(いずれも「全くそう思わない」—「とてもそう思う」の 7 件法)。(b) (c) はそれぞれ 2 項目、(d) は 1 項目から成る。

## 結 果

**分析対象者選定** T1, T2, T3 の全ての時点で回答し、かつ全ての回答において記入漏れやミスのなかった、現役新入生 53 名 (男性 26 名, 女性 27 名, 平均年齢 18.2 ±.38 歳) を分析対象とした。

**各尺度の検討** 時間的分節化尺度および主観的時間的距離尺度各々の、それぞれの時点における尺度内相関が、中程度からやや高い正の相関にとどまったため (時間的分節化:  $r = .49 - .79$ ,  $p < .01$ ; 主観的時間的距離:  $r = .43 - .55$ ,  $p < .01$ )、各項目を各尺度の下位項目として位置付け、一項目ずつ独立させて分析した。

**各項目の関連** 三つの時間感覚各々の同一時点での関連を調査する目的で、全ての時点において、各々の項目間の相関係数を算出した。どの時点においても、およそ類似した結果が得られたため、T1 の結果のみ Table 1 に示す。時間的分節化および主観的時間的距離の間で、全ての時点において各々有意な中程度からやや強い正の相関がみられた ( $r = .37 - .79$ ,  $p < .01$ )。そのなかで、概念間 (尺度間) における相関が、概念内 (尺度内) 相関を上回っているものが一部みられた。一方、それら二つの時間感覚各々とタイムギャップ感との間では、有意な相関はみられなかった。

## 考 察

時間的分節化と主観的時間的距離において、概念間における相関が概念内相関を上回っているものがみられたことから、理論的には区分され得る二つの時間感覚の区分は、実際に我々が感じている感覚としては、明確には区分されていないと考えられた。また、三つの時間感覚において、タイムギャップ感のみ他の時間感覚との有意な相関がほぼみられなかったことから、タイムギャップ感とは他の時間感覚とは異質なものである可能性が示唆された。

## 引用文献

下島裕美 (2001). 自伝的記憶の時間的体制化 風間書房

Table 1 卒業式についての主観的時間に関する各項目間の相関係数 (T1)

質問項目	2) 過去	3) 昨日 (逆)	4) 昔	5) もうそんなに (逆)
1) この出来事は、私にとってはまだ「現在の一部」である (逆)	.79**	.73**	.47**	.22
2) この出来事は、私にとってはもう過去のことだ	—	.65**	.55**	.08
3) この出来事をまるで昨日のここのように感じる (逆)	—	—	.45**	.24
4) この出来事を、かなり昔のここのように感じる	—	—	—	-.25
5) この出来事の当時から現在までの経過時間を考えると、もうそんなに経ったのかと思われる (逆)	—	—	—	—

注: 1), 2): 時間的分節化尺度, 3), 4): 主観的時間的距離尺度, 5): タイムギャップ感尺度 (逆) は逆転項目であることを示している。

網掛け部分は各々の尺度における尺度内相関を示している。

\*\*  $p < .01$